



信濃札

上

中村俊定文庫
文庫 18
765
1



海月部内

巖州司序



女も此頃して西小瀬礼さる人小
逢ふ家不鬼貫

此方乃くはめくも皆し茶挽子
し頃礼と聞へくはせりし川中島乃
積山といふもは信いさ家族もははれて
上京志すは川中の茶店不体ひ侍るに
おれく側不息いはる老人あうれく

六郎の御見集して居るにやうそ
両方の御見集して居るにやうそ
格やうな御見集して居るにやうそ
これくよそ御見集して居るにやうそ
子よ白き御見集して居るにやうそ
うけぬ御見集して居るにやうそ
よもまゝの御見集して居るにやうそ
かくの御見集して居るにやうそ

序一

草見の御見集して居るにやうそ
面會の御見集して居るにやうそ
伊丹の御見集して居るにやうそ
さるの御見集して居るにやうそ
れおの御見集して居るにやうそ
わうの御見集して居るにやうそ
古も今も御見集して居るにやうそ
かゝの御見集して居るにやうそ

又押在ひい叔父布言等相續るる
チかはいふを拵けて同ふ誦付れ
人といふに親と云くまじい風流を
弄む侍のぬかにけ好素翁老人年三
徳しかくる枇杷園の地ふれの玉糸いと
れちんと玉味留まらぬあめ佳縁を
まはに鹿茸うち伸き清水の里ま
あまきぬ人をも訪ふかへし極なの

序二

すいそぬおんまにまらちてけいん光るに
詣来り侍しうかの順れの吉との御園
しよちちらにちちちちちちちちちちの
栴もも昔は昔も有明山の月と
はきぬく房しきしちちちち集
を撰きて題名をふれのれを書れ
多かり詠訪人のよきがる玉糸おはと
園きり終り上田松代本園日すり奉

伊奈はふー京詰ふて甲斐のふ人
 おう花のふたへあふてふふふふ
 来ふりねけふりあは見持ふふふ
 けいふふふふふふふふふふふ
 あふふふふふふふふふふふ
 催は若いふふふふふふふふ



信濃札集

靈祭

鼻さのぬ文迎ふあ〜玉参里 素磔
 坤抱〜秋を知候 月 草司
 鴉妻の冷ふよき寂かよ 錦江
 陵里少き 蛇のか〜候 蜂二
 新笠能唯一際よ 恙〜ん 牡厚
 推乃住吾年 籍無〜り 柴路

随乃乃口乃達者不夕皆卷 呂吹
天窓の光係半日の 照 如蘭
音毛やぬ池を鏡に赤詠也 藤水
何道の道もとのあり道那る 草利
年終尾の真板中越る破障子 五什
むしらの蓋をあくる 吾風呂 曾立
まの持ぬ上戸の徳を笑ひ出し 恭雄
十日あぬまでも 世れ隠まぬ係 武日

上
一

不自由さと思ひしけなき信を此后 亜物
最しくも 行たる 次ふま 吐丈
蒜乃根に蟬の遠きと見えし 芦笛
因此生垣のおもしろきこゑ 八朗
市姫の社の詠乃志くさ 天朗
弦いまぬる 爲栞此帯 乙堂
負まると 碓せり 合月の縁 雲帯
中乃九口を 遙留の 杖 松 乙

物存のまゝ起るぬ報の音 詠雅
大く捨る音のほそく 吟化
流言も頂磨の浦風探返く 木籬
力を入ぬたたく門の戸 梅朴
草鞋くくく世念日を言 岚堂
愚癡も一つ乃家子柄あり 佛且
漸五十貫ぬ教を是取き 微席
別まんとさる 時のまるとさ 阿亥

上二

強うと馬逐之存とのかけ 正六
勇み兼く後胸あり子臥 仙市
産る度平念佛を亦忘色 春唄
大津平眠る曙の空 子景
さかくと月るく詠乃 菘一之
弱の飛音のそく海村返 介亭
冬迎く箕子まぬる瘦と海 梅香都
糸引まゝ 妹々 芥 裁 亜碩

嘘つゝぬ志るゝよ足を臨憶ぬ 吞鳥
病乃と裡て 泣き衣子 鬼洞
眼を寺へ預る 飯枕 青以
吉き都あり 不馳走を 位 若人
進こ出くむ川うけもの口を岡 万俣
思ひぬ方へ落る 湫 川 隆之
月影の如く 糸道る 繩子 正阿
次子月た 勢の白き十 竹菴

ぬり賣り顔色とて 孤歩以 田年
草よき名の 草やとりす 何上
咲き子 付日池 讀と一 免 干丈
古く名く 乃 呼吸子 待 草訖

萩 萩

萩やさくよきハある 萩之の萩 木籬
こゝろのこゝろありとや萩の萩 玉視
あつらふ世とあさの萩の志用意 五碩
あつらふふとせきつゝもの門あり 雲帯

上 四

あさの萩や人のさくろの萩の萩 柳島部
萩咲く萩ハさたさくろり 草利
萩良やさ此らさき萩さき 雄途
まろくゝ萩おもハする萩の萩 恭雄
やハくと萩萩の萩より萩 吾七
萩の萩 萩中流のま中う萩 嵐外
あさの萩おもひも萩の萩さき 子厚
あさの萩さた萩の萩の萩 月平

ほひくと報良付の人り亭一之
 とくくよ故遣や切そ萩の花 少雅
 暮や老る小文も誅すの夢 天朗
 吉く又西る萩も間のあれはを 鬼洞
 報良やむに忘るる蒼とも 雲帯
 萩ゆけくくも此出るおもむ 阿上
 暮よん年ささむる隙をさき 月孤
 枝とまや海への出る萩のむ 万葉

上五

あさるのあの家や井の宿 恭雄
 ありきたるあもいさな萩の暮 五来
 暮や老るる尾も結るるす 吐文
 鳴る萩の家の巢をらよ萩の花 素沙
 家の志るし動き出るる暮れ 素園
 枯るる松の枝と萩の暮 竹菴
 あさるのあも眠るのむさあけ 悟流
 萩さくわ削るるささる井の岸 文瓶

胡可保や虚も高を現りけく 高冊
蘇咲や枕しくしとり宿に 箕由
僧子向ると川草の咲くう家 武日
萩咲や垣をほくく家のまゝ似 曾人
あさるの草のくまを老より 曾立
萩の死よく草のそ花の十五日 美敬
萩根の上も草の道の付たり 由已
年増たこほる、萩のおもころ 松夫

萩の花の細いひとりう那 重止
葉もくひる来人くや萩の穂 漫々
あさるの草や登んく草の一本 草利
小の竹がく細る日けや萩の風 重行
畑白のや年寄持く菴の敷 杉堂
をく山りの萩やまこえる萩の花 文存
あさる保やんやりある處 賣 叶司
萩れ日の草を首に舞の宿 二蝶

朝鳥や何夏の口も秋、来 組東
衣もれずなとすれり 蘇の花 山南
蘇乃花子蘇をくあしし 如陵
衣もれずなとすれり 蘇の花 龜長
蘇乃花子蘇をくあしし 蘇 冬化
降る此れんをさぬ、宿の蘇 方居
腹一もん々 朝蘇、暮れの色 標叟
衣かゝる 背えと 蘇や蘇の花 真也

朝鳥乃花れをさぬ、来 有巳
酒買平手 蘇花 ち道
蘇乃花子蘇をくあしし 如山
起る衣もれずなとすれり 甫秋
朝鳥の蘇花 眞何
蘇咲やち道 一貞
あさる保や吹澄 標朴
秋の衣、入口 蘇の花 梅多郎

朝鳥やまともまぬおもあり 標朴
家伝のかくそ飛あは萩と萩 雄途
善徳の人年習ひし 裸坊 夕々
至重と朝川朝川 萩の花 介亭
朝の原身ん乃的を和進方 微席
家よあは新草あり萩の花 子厚
是舞乃 凡持る小無る部 如丘
萩ハ只仲能久子咲并たり 乙堂

上
八

善此朝も凡朝人山もま家 何彦
萩一きし一取身も活菴少 斗筲
伸き川を善持ちきくありまたり 千紫
萩を皆 善よ深るる答るる 詠雅
朝朝の淵るも此あく神山 樽
かかりを咲ハ常あり 西の萩 冬水
朝の係や人の来きを咲吉す 千尋
萩のま世と深ん年歩行所 物成

あさるるや報を仕とくは福の花 子景
 解らば嘆ともなぬ秋の花 為曉
 雲錦を惜みずとくは惜きし 春唄
 戸のしらたもよきとて秋の花 白尔
 報鳥や近しとくは出さ 家山
 勃くとと報もや秋の名残と 呂雲
 暮れに藍とくは嘆きとくは 嵐外
 あさるる伏猪の尻や報の花 緩負

報るるやと報は花もつるさけす 万里
 又とぬ間に嘆きひあはれ秋の花 杜厚
 あさるる報の吉くも秋は 文嘯
 三日立ると秋は家も秋の花 玉石
 暮れに下すはとくはつはとくは 和曉
 報乃枝報は春とくは秋の心 藤水
 あさるる報の砂も吸つく春とくは 乙牛
 報のよきしとくはの別とくは秋の花 和什

藤や屋を山さきへむれやも 著明
 赤まあまのうしろや萩の事より 希扶
 西さるの初もや藤の出来ん 正何
 赤つげも 赤くも萩の蒼の郡 桑中
 相白子粉糖のや海名残の赤 都丸
 蒼つるも萩や四五度枝の赤 由巳
 藤に能も細より 蒼の犬 不外
 返る来れも萩のあしし 柴路

上十

あさるのうしろや節句の 月平
 返る 眠の蠅のまきや 藤の赤 冬化
 藤の光をいふす余り 一の赤 赤文
 子と倒れ萩の寺の赤 残りの 標史
 相白や五つけ入る 赤の赤 叶竜
 心弱き風を吹きあらし 萩の赤 如山
 赤ゆけの蔓も藤を咲せり 阿上
 赤もるの萩の赤しを言ひ 嵐堂

朝鳥の喉や其を来もくふのまの 万俣
よきまら似たりも能く秋の礼 旭籬
あさるの花を暮しる菴の邸 一茶
おち塚の鼻の林よ秋の花 泚湖
暮れや暑き日ハ又 骨ッ入 孝以
くさくさくふき秋の秋の秋の秋 猶士
あまの條のまきまの朝の似ぬもの 小来
くほくく秋のきたり 花のまき 花逗

暮れや人吸ふやる 皆のこふ 葛夜
秋さくや袖の下か 吹くよて 松亭
朝鳥のまやあつとる 甚所 曾人
まらけり 影も余まの秋の花 如丘
暮れの木槿ふともせと合は 天偏
花を捻る遠の坊や秋の心 不外
あさるの喉の喉ハ動くや叶たりと 西堂
忘れしも秋ハ触りた 暮れり 若人

秋朝も露はせ平丸 一作
 さよくと秋の露をえ咲あけり 仙露
 あさうちよ来を露の清みけり 真恒
 露や白く咲て咲はるるに 植村
 あさう原の花を花の染る日と 方石
 朝白や散るる花の片 石鳴
 垣根もえぬ土の露を咲あけり 文雁
 露や石を夢を露の上 月泉

あさう保や是の思ふ夕皆露 梅叟
 あさう原の露は持たぬ 五付
 あさう原の紅露もはるる仕也り 若人

桔梗 萩

夕何秋の露を和し桔梗は 嵐堂
 萩よ萩 露一取来ぬ秋なる 杜厚
 其心きたる一まはり 春鳥

骨丸来る言此嬌一や萩の風 巴岡
 きらわしや桐之葉しる 希の交 知竜
 更る萩の葉やよ来や萩の枝 竹矣
 きらわしの思ひもけす 閑きなり 木雞
 うるさくも萩あり 秋乃迫るし 五碩
 弱るまき 枯枝の心の咲やまき 樗朴
 西の戸け戸伏来よし 萩の枝 雄途
 まく咲ぬ 枯枝を 希と 見る日 曾南

汝先子萩の石川お届のうあり 介亭
 多く此花の追るき死やうし 阿彦
 細濺の寝るや萩の心 雄途
 嘗るまて 何津もあき 枯枝の 別香
 何れもくも 同く 人よ 萩の 天朗
 向る年ふ 吹去る 枯枝の 志ルき
 只居ても 年と 寄之 萩の 月孤
 萩の心 一度 年 及む 枯枝の 春唄

藤つらぬんを 知ん 萩と家 恭旌
 をく 高を只一口 平野の 桔梗 佳遊
 川 越つ 聖なる 萩北と 遠山 吐文
 蒼き川と 花の 更なき 吉更山 中龍
 萩の 花を 迷ひ 春を 走らん 芦笛
 白き 糸を 流し 折る 吉更山 箕由
 家より 舟に 志む 萩の 言 山家山
 玉床より 通く 写く 吉更山 玉視

濃き 水の水の 流あり 萩の 蜂二
 花 飛つ 蒼の 酔い 桔梗の 南 草九
 深萩や 花の 念ハす 吉更山 南郎
 志とく 萩 解効 吉更山 松夫
 志つ 萩と 萩ハ 唱り 萩系 萩 藤堂
 うと 桔梗 又 念ハす 吉更山 山甫
 萩の 風 布 念ハす 萩系 通らん 仙市
 清き 水の ちと 萩と 冷く 吉更山 素沙

吹ぬ皆わづいの空なる萩の文 棟朴
提之新桔梗や凡の這入口 文里
障より上此業なり萩の文 榎
扱わぬく桔梗寄き垣根に 曾立
ゆき遠く小人の休むれ萩の風 梅朴
吹風乃り瑞しきより吉更咲 菅丸
子の戸や瘦果そく萩の友 木籬
きらかりハ都を出く夢あそり 仙市

萩の桑ハ衷も素もさきハ撫と 乙堂

女帝花 芒

道下よりとく足付より女帝花 漫々
桐のあた言吹物子芒の那 草丸
め帯も落けき常のよくめ 岳甚
花と云ハ花ともんてすきハ 雲帯
華あろう 花もえ枯ぬ女帝花 月孤

芒花と家子随ふ子もあし 正碩
携子乃落を携るやとこあし 宇全
穂まききのさとりい穂の欠り 雪岡
蒼も遠とそ新しきとあし 乙堂
赤立のゆえい志るる 芒五郎 天朗
黄衣道のまきり地面やあし 雲帯
冠は渡家よ泊りぬまきき 丘吹
傍り候子此あしとく 曲部 千丈

勅り候し若活もあし 蒼まきき 八郎
逆ふけりあし入をまきき 天朗
八月や旭中洲し花まきき 漫々
下休まゆのほくし地ぬ命花 柯暁
穂まききのゆきり新しぬるの輪 素園
ぬ命命蝶のふん欠落もあし 知竜
あらしの早き秋入花芒 共水
まききし新し教と降入向 呂吹

花賣や風のまきをを吹く竹小泉
草とたけしき必あり如布塔藤水
怪しきの風や芒のよそり口希杖
をこましく根う動くと足もあり伯希
大いこの丸の丸麻やまき竹柴路
人うそれいあもまき如希む杉堂
月の光く来て雨をまき芒の五什
をこましく一咲るとまれの溢ユホはさる菅丸

ゆきとれまきを命めやまきの穂藤水
や細き夕日とありぬ如希塔柴路
志もくとまきの騒く如希この家如凌
急なく言を流りまきましく夫六
鴈啼てまきまぬ口とありま南希
菊菊もま腐も悲しく如希花士明
人のほあつま言やく薄一の那仙市
昔々のの露よまあまをましく阿彦

神さくく 芒の妻此花きりり 猶士
 川橋と 赤く流りり 由良花 千紫
 芒打 松子を 赤く流りり 木雞
 女帝花 吹雪く 赤く流りり 子景
 花さくく 赤く流りり 園の 芒の家 列香
 打さくく 赤く流りり 女帝花 万寸雄
 おりり 赤く流りり 小辰由 龜三
 七夕乃 後も 赤く流りり 赤く流りり 浣砂

一ひの 破さくく 流りり 芒の家 琴女
 多の やた 燒さくく 立やめ 赤 徹席
 おもさくく 芒を 花子 赤く流りり 抱芝
 時多 家子 赤く流りり 赤く流りり 月平
 打芒 赤く流りり 赤く流りり 赤く流りり 正阿
 赤の 赤く流りり 赤く流りり 赤く流りり 隆之
 おりり 赤く流りり 赤く流りり 赤く流りり 少雅
 赤く流りり 赤く流りり 赤く流りり 赤く流りり 介亭

独り来くくんのかりるまの車 千丈
 ぬる布若た〜りぬら〜るまのり 柳若花
 船若あ年 照字よく立ま〜る 柳亀
 一貫の寄遠〜老〜 女若花 万帯
 摺若え 薄〜人の 並ひ〜り 乙堂
 又〜るい〜も 咲をぬるむ 素沙
 休まぬ〜 芒手若の付 竹若 鬼洞
 山の井の深さに 藤若をみ〜 蓬若

ぬら〜りの糸切〜るすき〜る車 兄田
 糸〜さ〜糸の文やを〜る〜 物成
 蜘蛛の糸を〜る〜り糸若 篋由
 をみぬ〜〜父立降〜く 渡〜る 東若
 船薄や佛の白のえ知〜 重若
 妹もえよ 菴よりえ〜る 柳若花 草丸
 鬼一ツ 吹出 次若のすき〜る車 隆之
 立降若 藤若をみ〜る 蓬若 吞鳥

登るも向ふ下をりすきこの歌 風山
又ほくせの泡なめぬ節は 鬼洞
昼もく後ろ窺しき薄の季 三水
侍よるてほくゆけをさまへく 方居
八月や芒の多此月八分こ 文雄
さきかへしつゝさきさきさきさき 吐夫
おも入る小田よ飛入薄の那 阿考
め節花葉山子の脊丈延みり 松花

ほけかゆを又まきほきききか 閑亭
唾の忽くしきよをさあへく 真阿
捧先平来りう薄の餘り此 一作
あゝ鼻の外よさつしゆ節花 木籬
赤人もあゝさす厚のすきか 田年
赤しきを人よこたれをさあへく 予根
又しきさきの中りあそこの案 蜂二
大徳徳耳 先虫さくしめ節花 恒見

弱き物もきき高くそまう 遠之江
 糸撫もみつき糸やをこまう 貝嶺
 移まらぬ極もなかり花すつき 榎秀
 折ありつ増ふ秋ありぬ神志 二蝶
 面北薄そ年増ゆる糸いあ 月景
 をこぬつし枯も消る色とあは 田年
 田年まて芒と寒くあらめり 太年

夏袴 葛

おも強く是かか 夏とあぬ 祿雅
 中ぬは枯る夕アの有方音仏 榎村
 小車乃寄り方もあ 夏袴 佛且
 のことらや風の上さふ葛蔓 文雁
 夏袴 袴のなごふの魚らり 仙市
 菴とくもれゆきせら葛花 月景
 おしるきすふまらり 夏袴 呂吹

妹や猶西に真菫のひびき
 梅香部
 脚の初へよりぬ婦らとぬ
 可厚
 菫のあまた露の澄きも初らぬ
 草司
 いりめくさくさものを婦ら袴
 玉露
 けろくく入り眠る真菫は
 八郎
 醒る色の愈更におちり衣袴
 曾立
 花は皆恵心あるや真菫系
 素曉
 あり又待望の久し
 如蘭

寒くちくも麻の寒く真菫は
 杜厚
 何れとまはくさく婦らとぬ
 久呂々
 山依も輝きをたぬ菫うら
 武日
 乳のそよよとさそり菫とぬ
 一圭
 うたえちか菫またさき溼りあ
 抱芝
 夢を流るるをたぬ菫袴
 蒼什
 菫の葉のう初れぬもかみり
 曾立
 待言を忘るぬ菫や夏とぬ
 杜厚

きりくくるの藤の紫葡萄の破 素竹
おとけしき人よるまよふ花をる雨曉
今城し山の越へり真葡萄の 菟堂
高直ぬ日も丈夫あり花袴 岩堂
衣の中は葡萄の花也へ隠し入り 仙市
色く平咲ても見せよ花をる 東水
葡萄の紫のまきも悲し秋花を 南丘
紋よまき花を指りり花ちをる 正六

取付て立や月夜の花をる 共柳
花をるぬ何れもあま人恋し ふと根
ともまけい蔓の花をる葡萄の道 微席
花袴は花能まの交 醒ぬ 松乙
葡萄の葉のちきれくて道の形 正六
男ももあまも又くは花をる 千丈
ましとど花をるまをる葡萄の上 万寿雄
ましとど花をるまをる花袴 玉視

日此光の志きりも葛ハ浅糸なる 子景
啄木きの脛も知るや夏袴 蟹守
泥の上も葛吹日といふありり 春唄
草の戸や草のり風を夏袴 蛙文
迷ふも紫葛地の糸の葛衣 松花
古臭くおも整へば婦らともぬ 曾人
糸の戸も布きたるや葛の言 詠雅
傘の下に白ひぬきし夏袴 可堂

糸くもあまの糸もきりも葛乃知 却丸
露の糸の粒も知るり婦地をぬ 漫々
葛の糸もゆる糸信取の夏 隆之
二切といふおきぬ糸あり夏袴 槌村
秋の日やかくもかひて葛蔓 草竜
糸乃言り降るを婦らとるは 田年
動くはもほらく暑く葛蔓 音以
二夜もゆる糸の糸や夏こは 又齡

菖の葉は星の能おもはせたり
 有斐文
 白くく三の海りり 友えり海
 亜物
 永流を引る海菖のかつふか
 文瓶
 秋花の栖ありあり菖くつら
 岳基
 菖の葉の松平能おもはせたり
 醉々
 山寺の米梅日あり菖りり喜
 旭雉
 睡くわん菖の葉の下のり
 吞鳥
 菖くつらゆめ喜を恨えりり
 真也

友松く様通ひりり菖の音
 恭雄
 菖の葉のむら祭出りり物草い
 吐火

菖菖 永赤紅

菖菖をえりり親くする花の中
 佛旦
 永赤紅おや春のぬけ安き
 松乙
 菖菖のふそりともい老るり
 文雁
 寂くさを咲も流さぬ永赤紅
 菖雪

新世草平薄の骨もあらしめ 魯井
 永赤紅叶舞踏を消るよの 竹菴
 新世大暑の庭家より遠く 如蘭
 子んよ 晴ふ詩らん 永赤紅 二松
 新世ハ冬舞の葉もあらしめ 子厚
 能久平ありておとふと永赤紅 正何
 かのやや先く用て花の寂 一之
 りよの口もくわ吹笛る永赤紅 隆之

新世ハ茶心と直れ瘦みなり 天朗
 生ころのよ 燈さえもる 永赤紅 青以
 新世道の 梳のかすひり 徳事しあう 信彦
 永と永 換抄志むゆ歌もかき 右斐
 かのややえとあへる言ハあうりり 竹磨
 穂年出ぬをよ 揃うゆ 永赤紅 解虫守
 新世の古く 秋く 花の 簪 松花
 花咲く 園子よ 道く 永もかき 文嘯

新葦は照日の底に眠る
 芦笛
 是川のももき極や 歌亦紅 蛭文
 新葦の果も実あり 芋もまゝ 介亭
 花のまきもたれ 歌亦紅 曾人
 かき葦や朽へかくる 其のま 呂吹
 新葦を枝子留り 我亦紅 醉々
 新葦を眠る子実のまけ 挹芝
 よかぬも 秋の急あり 歌も如 芦陽

新葦や彼岸の里に揺る 重止
 新葦も報のあまき 初り 月巢
 地のをきと 埒一程あり 歌亦紅 子厚
 新葦のまき 何れも 終らり 一貞
 新葦も木乃葉の終ぬ 白 雲帯
 新葦も木乃葉の終ぬ 白 牝司
 伊や 埒もとく 月巢 露丸

花のこほ色はあきまの花は競ふ如
 秋風の後ろ今や秋もあき 月孤
 前まを花の葉をきれり 楳叟
 花あき花にほけそ秋赤紅 吐火
 かあまは細お人の世来は 蒼什
 たやまこほ色もあき秋赤紅 一水
 前まの細をえおはるよあき 嵐堂
 秋もあき年毎に人をあきし 杜厚

かあまは朝陽まもあきり 阿彦
 秋赤蓮の葉よあきし 阿厚
 前まの葉をわらもあき 鴉五
 秋ひもあきあき秋赤もあき 桑中
 人あき秋前まの葉をきれり 正阿
 秋あきあきあきあき地揃 伯希
 前まの秋の葉をわらり 千丈
 秋赤もあきあき秋赤赤紅 如蘭

新苔を折て走る坊々あ
 五遊
 怪くと報を指や永赤紅
 州司
 新苔と入るにむくもあえ入
 文狐
 蒼と白ぬもむと白りよ
 素竹
 娘さしぬ死を新苔の一志きり
 宗道
 尋歩り老の小あよ永赤紅
 南帝
 新苔や余り新き流ヨハヒ星ホシ
 一作
 地揃る新も云ぬさかりの都
 新苔

新苔や何とあく月の志きり
 岳基
 善虫乃善毛流乎地揃
 真阿
 新苔よ危い平を志川あたり
 石鳴
 月子付く新き新き永赤紅
 荒堂
 新苔の志も揃り次たらおとよ
 弁矣
 咲てかゝる志子習ふや永も物
 阿衰
 かる新平一習り由くあり新の子
 方居
 立交るまゝの花あり永赤香
 春唄

蒨葦よ取付やま〜影匠所 真也
 赤き日ま露の咲りり 歌も如 天淵
 蒨葦い花のをりりを かくまら 松乙
 老くも若きも 古〜地掬 蘭亭
 蒨葦や 咲くま 竹 葦 文嘯
 狼の糞のいき水や 歌本香 一作
 蒨葦を思ひ 夢ゆりひまら世 正六
 家も夢さしとからひ〜 風も香 岳基

父言やま〜蒨葦の穂も 乙牛
 秋の世の道 真の〜と 地掬 南丘
 糸〜さハ 物も 咲きつる 蒨葦ら 牝丸
 何よりも 菜ハ 候りり 歌亦紅 青牛
 蒨葦ハ 為三日 咲中も なる〜 若人
 一粒ハ 菜のあり〜よ 歌も如 吞鳥
 淡色や 歌亦紅 咲筈の陰 浣砂
 歌も如 歌亦紅 咲枝ハ 佛具

移すあハ世活もあはれ歌本番 石鳴
歌亦紅 今年の落も古しり 乙堂
歌亦紅 取もんを歌くもの 呂吹
歌亦紅 咲や淋き菊の運 葛夜



村山信吉
尾書



MM 18

